

惜しまれてならない。

故 森川喜美雄君を悼む

望 月 清 司

ことしの冬は暖かかった。われわれの親しかった友人森川喜美雄君の突然の死をとむらう葬儀の日も、すでに春を思わせるやわらかな陽光に包まれていた。やがて、冬が去ったことを宣言するような強風が関東ローム層の土ぼこりで空を赤く染めるころ、ようやくわたくしは君がほんとうにわれわれら風のように去っていったのだということを得心するようになっていた。そのあまりの唐突さのゆえにしばらくわたくしの胸を去来していた、なにか悪い夢を見つづけているのではないかという疑いはさすがに今は消えている。図書館5階へ上ってゆくエレベーターの中に、今この扉が音もなくひらくと正面の社研事務室の明るい光を背におう君の姿がごくあたりまえに目にとびこんでくるのだ、という錯覚も今はふりはらえた。だが君がわたくしの胸に大きく打ちぬいていった空洞は、埋まるどころか日を追って拡がってゆく。そこを吹きぬける風のつめたさに心をしめつけられながら、君が残したものをどう受けつけばよいのか森川君それをひとこと教えてくれ、という問答をくりかえす日々がつづいている。そうした卒然たる君の死であった。

2月15日、主を失った月島の家机の上にわたくしは一枚のメモを見た。万年筆がそのメモの上に斜めに置かれていた。こまごまと誌された文字のうちの一行は、夜つまり君がその万年筆にキャップをして寝ついた夜の翌日、『年報』製作の件で刊行元の未来社に何かの連絡をおこなう予定を語っていた。疑いもなく君はあの幽明の境を、『年報』編集者として、社研編集部代表としても越えたのだった。それはたたかにおける死であったと言ってよい。なんとしても2月中旬に、つまり昨年よりひと月早く『年報』第7号を発行すること、そして遠くない数年後に『年報』を額面どおり一年の頭初に世に送れる慣行と体制をかためること、これが2月14日の夜、君が筆を斜めに置くまで抱いていた執念であった。あの一行は今なおわたくしの眼底に灼きついている。それをしっかりと灼きつけておくべき特別の責めをわたくしは君に負っているとの思いを今も禁じえない。君を社研編集部に誘いこむきっかけをわたくしが作ったからである。

一昨々年の10月末、おそくなった教授会を終えてから、向が丘遊園駅近くの席で社研の事務

局会議をもつべく、一群のメンバーがバスを降りてかたまつた。かろうじて事務局長の任期をつとめあげたわたくしの後任選考をもふくめた新人事検討がその議題であった。なにげなく改札口を見やると、ふりかえりもせず黙然と歩みさつてゆく君の広い肩が見える。君はそのころ、会議に欠席していてもがめられないというていながら一事務局員だった。わたくしは君に追いついて、ぼくなんか出なくていいだろうと渋る君の手をひっぱるようにして会議の席につれこんだ。編集部代表の後任として君を所員総会に推すことは、君の強い辞退にもかかわらず割にすらすらと決定された記憶がある。その後12月はじめの総会まで、わたくしは何度君を口説きおとすことのむずかしさに音を上げたことであろう。君が平俗な持ちまわり当番論や、ただしっこいだけの教唆煽動には眉さえも動かさぬひとであることは、このときばかりでなく、のちに思い知らされた。昨年の暮まではほぼ半年がかりでわたくしは、ある講座ものにウェーバー論の執筆を君に依頼し懇願し脅迫しつつついて首をタテに振らせることができなかった。それだけに、君が編集部にはいることを結局承知したについては慎重な考慮とそのすえの決意がなされただろうというのが、今のわたくしのなぐさめである。

それからの君の活躍はだれもが知る。われわれは正直にいつて呆氣にとられた。君があればど実践的なプラン・メーカーであり催促魔でありえようとは、以前の君から君のイメージを作っていたわれわれの誰が想ったことか、水を得た魚のように君は、おそらくもって生れたのであろうオルガナイザーとしての資質を発揮しはじめた。歴代なんんかの編集部代表が攻めあぐねてみな匙をなげた — わたくしもそのひとりであった — 某所員からついで『月報』の原稿をせしめた手腕はその一角にすぎない。こんどの『年報』第7号では、みづから「トロール船の船長」と豪語しつつ、それこそ一網打尽に比較体制論グループの共同研究をさらいとった。3日にあげずとさえ言える電話での小当りに接して、まあそのうちに、とか、いやその忙がしくて、などと逃亡の予防線を張っているつもりでいて気がつくときかざるをえない破目に陥っていたという経験をおもちの方は多いだろう。いまは絶筆となった『年報』第7号の編集後記は、君の会心の笑みがこぼれてきそうなこの網打ち始末記でもある。昨年10月末の研究合宿に参加した君は、「その日が事実上の本『年報』完成の日であった。ここで“魚は網にかかった”のである。」といい気持そうにしている。

集まったメンバーのうちまだ執筆予定者であるものの苦しい言い訳けをもまじえた、それなりに楽しい進行報告と討論とに、君は長いテーブルの端で全員を見わたしながら終始ニコニコと耳を傾けていた。釣りをこよなく愛した君は、かかった魚どもの最後の手ごたえを悠揚と楽しんでいたにちがいない。あの夜の君のやさしい表情を記憶にとどめておけるのは、ひととき

友人として君に接してもらえたわたくしのひとつの幸せである。

*

だが考えてみると、こう書くのは君への礼を失している。君は執筆者のひとりとしてもあの席に坐っていたのだから。けれどもこれはわたくしの印象だけからの推測だが、出席者の大半は君を編集者としてだけ意識していたのではなかったか。なるほどこの意識はおかしい。おかしいがそのような印象をひとが共有した心理的根拠はあるのだ。それは執筆者のひとりでもある君がまさきに百枚近い論文「ブルードンとヒルデブラント」をすでに脱稿してしまっているという「事実」からきている。もちろん君はそういうことを正面切って督促の種とするような人柄ではない。だれかへふと洩らただけであろうその情報は、ただちに全員に伝わり、だれもその原稿を見たこともないのにそれが「事実」であることをつゆ疑わなかった。執筆予定者にたいする最後の印導わたしの感が深かったあの席で、君が編集者としてのみ映ったのは君が文句なしの執筆完了者だったからであろう。

君はそういうひでであった。『月報』を毎月刊行するという当然の、しかし困難きわまる仕事を果すためにいわば部内原稿を調達することをいとわなかった。ふりかえれば第77・78号の「カミュにおける『反抗』の意味(1)(2)」は今にして数えてみるとそれぞれが70枚を超える大論文であったし、また第92・93号の「サルトルにおける人民戦線の問題(1)(2)」も、二つの号をともに全面独占するところの、合計でやはり150枚近い大作なのである。これはやむをえぬ独占であった。第77・78号は2月と3月。第92・93号は5月と6月。これらの原稿は年末から4月にかけての、編集者ならだれしも覚えのある休み枯れの季節である。公私の雑事がほどよい間隔で確実にあとからあとから畳みかけてくる日々。いわば魚信絶無の状態であろう。竿を折ってことごとく海中に投じたい狂気にかられる月とってよい。君は黙ってあいた穴を埋め、埋めおわってもその心労について語ろうとしなかった。君が400枚近い未刊の力稿を遺したことをあとに内田教授からうかがったが、右の事実上の四連作はその遺稿の構想とほぼ一致するものらしい。ありていに言えばタイプ印刷で見映えのせぬ『月報』に、君はひそかに期するところあった大作を惜しまず提供し、責任をはたした。

こうした君の人となりを知悉し愛していたからこそ、魚たちは結局よろこんで君の網にわれ、とわが身を投じたのである。とはいうものの、おのずからなる君の徳をもってすれば水の低きに流れるごとく原稿が君の手に流れこんでくる、と期待できるほどには社研所員は善人ぞろいではない。そこで君は電話魔の仮面をかぶった。あれほど寡黙だった君が、さりげない雑談を

枕にし二廻りも三廻りも迂回したあげくに「ところで」と切り出す雄弁のひとになる。ありし日の君を語りあったわれわれのひとりが、ふとこんなことをつぶやいた。「森川さんの電話というのは、もしもし 言ってからふっと数秒間声が出てこない空白がありましたね。あれは、電話する前にあの男にはどう話しかけたら効果的だろうかといろいろ考えてみた結果を、もしもしのあとの一瞬に反趨してみていたんではないでしょうか。」この思い出はまことに腑に落ちる。世間話からなかなか肝心の注文にはいらぬ君のことさらの弁舌を聞くのはむしろ痛々しかった。おい無理するな、ぼくの場合はぶつつけて催促に入っているよ、と言いたくなるのを抑えて受話器のかなたの声に聞き入るのが常であった。よきオルガナイザーの資質にめぐまれてはいたが、その資質を君は自分にしたたか鞭打ちながら磨いていたのだと思う。あの電話の声も今はないのだ。

*

もとより社研もまた人間のかたまりである。さまざまな意見が共存して、妥協しあったり批判しあったりする。いなそういう相互批判が自由に交されていてこそ社研であった。君はそれらに真摯にコミットして、編集の場から社研を生きた「自由人の連合」たらしめようと心を砕いた。時に必要以上にさえ砕いた。

君が学問への道をきりひらいた入口は、君の業績一覧にもあるようにマルクス主義とブルードン主義との対決の問題であった。すでに学界で定評を確立していた君のブルードン研究については、それから教示を受けとる一方で積極的論評をおこなう資格などまったくわけではないし、また森川体系の全貌をここに要約しうるほどまだ君に学びきつてはいないけれども、ごく大づかみな印象をいわせてもらうなら、それは西欧近代が確実に自己のものとした個体の自由、これを思想の中軸に据える近代批判の思想がどこでマルクスの社会把握とすれちがってくるのか、すれちがってくるにもかかわらずマルクス主義の社会＝歴史把握は個体の自由の問題をどのように自己の血肉ともせねばならないか、を発想の基底に据えていたのではないだろうか。オイゲン・デューリングを『反デューリング論』を史料として批判することと同じように、『哲学の貧困』をもってブルードンを断罪することはやさしい。君はなぜ『哲学の貧困』があれほどの執拗さで『貧困の哲学』を問題にしたか、を問題にした。『哲学の貧困』で完膚なきまでに粉砕されたはずのブルードン主義が「パリ・コンミュン」で蜂起する大衆をとらえたばかりでなく、現代に真に自由な連帯を実現しようと希う知性をも深くとらえていることを、君はするどくサルトル＝カミュ論争に見出している。この論争の原型としてマルクス＝ブルード

ン（およびシュティルナー）の対決を重ね合せつつ、君は、共産主義が生産の組織をめざすことで個性性を認めぬ専制主義をもたらすというブルードンの批判から、それをいかに反批判してはならないかを学ぼうとしていたようである。人間の被造物がそれを代表すると称する人間を通して人間を支配するという事態への抵抗、ブルードンとシュティルナーに共通するこの予感を、それが目前の階級的勢力配置の状況判断において誤っているという理由で無視し去るのではなくて、なぜかれらが誤ったのかを了解する視点がもし君になかったとしたら、マルクス・ブルードン問題を現代の問題としてかぎつける嗅覚を君はもたなかったはずである。君のカミュを見る眼はあたたかい。にもかかわらず君は、カミュにあつて「労働のヒューマニズム」と表わされた思想的原基にサルトルが「欲求のヒューマニズム」を対質させるすがたを、ある痛ましい「回心」としながら評価する。かつてのアナーキスト・サルトルが「現実的なアンガージュマンのうちでローザ主義を可能なかぎり堅持してゆく」のを冷戦のなかでの立脚点として選択せざるをえなかった、その違和感を自分のそれとして見つめぬこうとする姿勢が君にはあった。さしあたり冷たい戦争を与件として、そこでどうしたら大衆の「主観性」を最少限度で生かす「人民戦線」を編制できるのか、必要とあらば自分をその統一戦線のなかでどこまで「回心」せしめうるか。サルトルのこの投企は、君にあつても自身の主体を賭けての課題であつたと思われてならない。そのかぎりではマルクスは——そしてブルードンも——君のまぎれもなき同時代人であつた。君は一個の社会思想史家として二人の対決に冷静に耳を傾けながら、二人がたがいに問いかけ批判しあう声を、自分の胸に集づくる二つの魂のそれとして受けとめていたのではなかつたか。当面の戦術的要請からそれとの疎遠な同盟をむすぶ、そのようなかりそめの共闘者としてブルードンは遇されてはならない、ブルードンのよって立つ基盤を克明に分析した上でそのよび声が民衆の心をなぜとらえてはなさないかを、古い言葉を使えばマルクス主義は他山の石としなければならない、君のねらいはここに定められてあつたと書いたら君は見当ちがいが甚だしいと苦笑するだろうか。

*

君とわたくしはかつて神田校舎で研究室をともにした。君はひっそりと読書するありがたい同室者であり、わたくしのほうからきっかけを作らないかぎり君の口がほぐれることはなかつた。あれは1965年ごろであろうか、わたくしが『諸形態』解きほぐしに熱中していたとき、君は『資本論』のなかの疎外の論理の問題を活字にしはじめていた。わたくしはそこで、それが『諸形態』研究とどんなに深いところで結びついているか、などとは夢にも予想せずに君から

ヘーゲル——「ヘーゲル」の発音が尻上りになる君の口ぶりがなつかしい——への深い造詣に裏打ちされたマルクス疎外論の手ほどきを受けたのだった。留学をひと月ほど後にひかえて何かと気ぜわしい一日、思えば赤面の至りでしかないが、平田清明氏と並んでの『諸形態』研究会に引っぱり出され、そこで『要綱』のなかの『諸形態』という見方をつきつけられた。わたくしがそれまで単行本『諸形態』読者でしかなかったことは告白するまでもない。平田氏に痛打され、『要綱』について見てわたくしは『諸形態』がほかならぬ疎外論でしめくられているのを発見してアッと思った。だが、平田氏から提示されたブルードン批判—所有論—疎外論の系譜を、君の、ブルードンの集合力—マルクスの社会的生産力—疎外止揚の論理でもみほぐしてもらうには、もう時間がなかった。それでなくとも君の口はじれたいほど重かったのだから。心を残して、しかし歴史研究者のはしくれとしては『諸形態』と疎外論とにブリッジをかけるのに『ドイツ・イデオロギー』の所有形態史論というあの難物を避けて通るわけにはゆくまい、これはたいへんな問題に頭をつっこんだものだという大きな不安を抱いたまま、わたくしはしばらくをマルクスと離れて異国に暮らすこととなる。帰って再会した君は押しも押されもせぬブルードン専門家としてまたもや数十歩も先に立っていた。

君が研究の出発点としてえらんだ地点にわたくしは今ようやく立っている。そのブルードン研究に君がこめた思いをわたくしは歴史の問題として解こうとしはじめたばかりであり、死に急いだ君がえがきつつあった統一戦線の論理をわれわれはまだ共有するに至っていない。

森川君、これから君に本格的な手ほどきを受けるつもりでいたのだ。君はあの二つの魂のあらがいに君なりにつけようとした結着を形にするまで生きているべきであった。苦しい模索に君は体当たりをつけ、そして不慮に弊れた。まだ未墾の荒地たる日本のマルクス研究に、しかし君のいれた鋤あととはくっきりと印されている。

比類なくおのれに誠実であった友よ、いまはやすらかに眠れ。

(1973・4・5)

ハ　ゼ　釣　り

森　下　健　三

もう5年くらい前のことであろうか、確か9月上旬だったと思うが、森川君がハゼ釣りの手ほどきをしてくれるというので、同僚の山田克巳夫妻と一諸に出掛けることにした。当日は快